
タイトル未定

RAMHANE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タイトル未定

【Nコード】

N3826S

【作者名】

RAMHANE

【あらすじ】

あらすじとか書けるほど進んでないのです

遭遇 ~ " Footsteps of the death "

書きかけ、無駄に設定重ねるだけで小説書かなかった頭弱い作者が自己満足でちよつと書いてみただけ。続きが書かれるかすら微妙。書くとして、多分何回か改稿します。あの程度が残酷描写かは悩ましい。

死がやってくる。ひたひたと、小さな足音を響かせて。

それに見られた瞬間。抵抗は無意味だと直感した。確かに時間は稼げるだろうが、ほんの数秒間でしかない。その数秒が終われば命を奪われることを彼は理解した。

だから彼は逃亡を選択した。誰かに会えば状況は変わるかもしれないと考えて。しかし彼は同時に悟ってもいた。誰かに会えば助かる。そんな思いは無意味だと。

「はっ……あ……はあ……？」

何故なら、先ほどから誰にも会わないのだ。コンビニの前を通った時。店員が見つからなかった。偶然かと思ったが自動ドアも反応しなかった。

まるで時間が止まったかのように。

「……っ……、うあ……はあ……」

抵抗しても無駄だと分かっている。逃げてもいずれ追い詰められるのなら。それを死と呼んで何が悪いのだろうか。

——全ての異変は、あの音が聞こえてからだ。

ガラスの割れるような音。それが耳元で響いてから、世界はおかしくなった。

けど、だからどうしたというのか。気付けたところでどうしようもない。

どこから世界がおかしくなったかなんてことが解っていても。今の彼には関係ないのだ。

「どこ、まで……逃げ、るの……？」

死が語りかけてくる。

彼が死と呼ぶそれは、黒のワンピースを着た、中学生ぐらいの少女の姿をしていた。口元から大きく下まで大量の血で染めている。彼はその血の理由を見た。だから追われているし、必死に逃げている。

最初、少女の姿をしたそれとの間には最初十数メートルの距離があったはずだった。

しかしその距離は今ではおおよそ五メートルほどで、それは一向に開く事は無く縮まっていく。

彼は思う、少女の姿をしたそれは今、自分を追い詰めて遊んでいるのだと。

恐らく全力を出せば一瞬で接敵し、確実に殺すことが可能なのを敢えてそうしていないのだ。

逆に言えば、それが遊んでいる間は生き延びられるはずである。だから今はその遊びにが終わるのを長引かせるしかない。しかし、そう考えた彼の耳元で突然それは呟く。

「――飽き、た」

それは言葉は、死の宣告だった。不幸にも先ほどの彼の思考の正しさは証明されたのだ。

彼がその言葉を聞くと共に、首を引かれて仰向けに倒れていた。咄嗟に頭を打ち付けないように動かなければ、今ので気を失っていたかもしれない。しかし果たして、今から行われるであろう事を思えば、それは幸だろうか、不幸だろうか。

彼は今からそれに、その肉を喰われるのだ。

彼が遭遇した時、同じように喰われていた男のように――

だから彼は遂に抵抗することを決めた。

それは全体的な動きにしてみれば小さいが、成功した場合の効果は高いと思われた。逃げのびるチャンスは増えるはずだ。それを行う事に対する嫌悪感を押し殺した。

(っ——)

そして少女の姿をした化物の顔に素早く手を伸ばし、人の姿をした生物であるなら重要なはずのそこ。人間の知覚の八十%以上を司るとされる感覚器官。

——すなわち、その目に右手の指を強く突き入れた。

ぶちゆりと嫌な音がした、指先から走る強烈な怖気に耐え。指を曲げ、挟むよう、掻き出すように引き抜いた。その目から確かな鮮血が吹き出す。

「ぎっ——、が——、いあ——、ああああ——あああああ——！
」

化物は目を押さえ痛みに悶え声を荒げ絶叫した。

いくら殺されそうであり、それが物理的に人を喰うのを目撃したとしても、その姿と声は少女そのもの。彼の胸中に幾ばくかの罪悪感が浮上する。

(馬鹿か僕は、罪悪感で殺されるなら、何のためにそうしたんだ)
彼は素早く立ち上がり、走りながら体勢を立て直す。

あの怪物から逃げる。せめて距離を取る。
だが、そう考えて走り出した彼の動きは阻まれる。

「な、なんだよ……これは!？」

それは壁のようなものだった。目の前に、見えない壁が在った。彼は見えない壁を叩く。傍から見ればパントマイム芸の一つの様な動きだが彼は必死だった。何故ならまだ彼は十数メートルしか化物から離れていない。その程度の距離は多分――

ふいに背後から声が聞こえた。それは少し前の、痛みに悶える声ではない。それは確かな怒気を孕んだ、殺意の塊の様な声。彼は焦り、見えぬ壁から手を放し、振り返った。

「――」

化物は手を下げて、確かに彼を見ていた。血の貯まった赤い目で、彼を見ていた。

最早言葉にならぬその声を響かせる化物を見て、彼を再び絶望が襲う。

そう数秒。たった数秒で、化物の眼は治っていたのだ。

彼が抵抗によって稼いだ時間は、十にも満たなかった。

彼の足から力が抜けた、腰が抜けたのだ。見えない壁にもたれ込むように倒れる。

化物が脚に力を込めた。彼に向かって跳ぶように掛ってくる気だろう。

十数メートル程度。先ほど引き倒されたように、その化物は一瞬で詰めるだろう。

ただし、今度の一撃は、恐らく問答無用で彼をただの肉と骨へ変える。

彼は目を閉じた。もうこれで終わりだと諦めた。

下らない事が頭を過る。

思う。ああ、幼馴染が見れば文字通り「腰ぬけめ」と罵るだろう

か。

（僕としてはここにきて失禁してない事実を褒めて欲しいぐらいなのにな……）

ここで僕が死んだらどういう扱いになるんだろうな——殺人か、行方不明か——。

そして全てが終わった音が——

——響かない。

代わりに響いたのは、あの音。ガラスの割れるような音だった。今まで身体を預けていた背中の壁が消え、彼は頭を打つ。

痛かったが、それは生きている証拠だった。

それとほぼ同時と言ってよい速度で、続いて断続的な金属音が響く。

首を持ち上げ、ちらりと化物を見れば、十字架の形をした細長い銀の杭が三本。

化物を貫いてアスファルトに縫い止めていた。

そして、上の方でトンっと小さな音がした。

倒れたまま空を見る。まず奇妙なモノが目に入った。

月が、血の様な紅い月が。空に輝いている。そしてもう一つ。

「——まさに数秒の差。ギリギリと言ったところね。本当に危なかったわ」

紅い月を背負い。腰まで伸びた長い髪を風にたなびかせ、一人の少女が笑っていた。

彼女は救いの女神だろうか。それとも、もう一人の化物だろうか。

いや、例え化物であつたとしても。彼女になれば殺されても良いかもしれない。

そう思ってしまうほどに。彼はその光景を、綺麗だと。美しいと。素直にそう思った。

彼女は化物に咎めるような冷やかな視線を向けた。

いや違うな――まさに咎めているのだろう。

「――喰人鬼、那岸弓佳ね？」

彼は今更になり、自分を追っていた少女の様な姿の化物が喰人鬼という分類である事。

自分達、人間と同じように、その化物が那岸弓佳という名を持った存在である事を知った。

「あ、ああ……そん、な……」

那岸弓佳と呼ばれたそれが、先ほどの怒りの表情とは一転して、脅えていることが彼にも分かった。自分を貫いている三本の杭を必死で抜こうとしている。逃げようとしている。

しかし抜けない。揺れる事すらない。

まるでアスファルトというより、その空間自体に刺さっているようだ。

「人食い件数――もとい、殺人件数六件。到底許される罪ではないわ」

ふいに悟る。今の今まで、それが彼にとっての死だったように。

「人であれば、法で裁かれるべきでしょうけど。貴女はもう人として裁くことも出来ない、劣悪な悪鬼でしかない。だから吸血鬼である私が。紅月朱莉沙が、力を以て、その身を裁く」

彼女は、この朱莉沙という吸血鬼は。まさしく那岸弓佳にとっての死なのだろう。

吸血鬼と喰人鬼。二人の間に半透明な三枚の紅い円陣が描かれる。恐らくそれは、魔法陣と呼べるものだ。

「嫌、いや、死にたくない――」

吸血鬼の少女は空中に舞い。一番身近にある魔法陣に向かって跳んだ。

「きっと、貴女に喰われた人達もそう思っていたわよ」

そして終焉を告げる詩が、空に響く。

《――Earth to earth? (土は土に!!)》

少女が爪先を一枚目の魔法陣に触れると、その姿は紅い焰に包まれ。

次の魔法陣へと向けて加速した。

《――Ashes to ashes? (灰は灰に!!)》

そのまま二枚目の魔法陣を貫き、焰を収束させて加速。

その焰は白へと変化する。

《――Dust to dust? (塵は塵に!!)》

そして三枚目の魔法陣を貫いた時。

その焰は遂に蒼へと至り、少女自身が一本の焰の杭となったかのように。

喰人鬼、那岸弓佳がいる、その場所へと突き刺さった。

――燃えるような音だった。

アスファルトは焦げ。周囲に熱気が溢れかえる。

後に残ったのは、風に舞う大量の灰。

彼を襲った喰人鬼の少女は何処にも居なく、

ただそれを眺める彼と、吸血鬼の少女だけがそこに居た。

息を付き、彼女は彼に向かって歩み、そっと手を差し伸べた。

「大丈夫？ ……火傷とかしてないわよね？」

「——う、うん。大丈夫、かな……？」

これが——

彼、白峰彼方と紅月朱莉沙の出会いである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3826s/>

タイトル未定

2011年10月8日23時14分発行